

地域が誇る ブランド 「関の刃物」



関市で生産された品質の高い刃物を表す「関の刃物」が、特許庁の地域ブランドの認定を受け商標登録され、岐阜県関刃物産業連合会の北村正敏会長らが尾藤市長に報告しました。同連合会では関の刃物業界のイメージ向上のため2年前から検討を重ね、

昨年8月に出願し、今年7月に正式登録が認定されました。刃物にまつわる暗いニュースが取りざたされるなか、近い将来「関の刃物」のブランド名がついた商品が世界市場に出回る日が来ることでしょう。

あんな事、こんな事



教育の場でも連携を

7月7日の関市と中部学院大学との連携の包括的協定をうけて、教育の場においても連携強化をと、31日、関市教育委員会と中部学院大学、同短期大学部との連携協力に関する個別協定書の調印式が行われました。今後は教育実習のほか、学校教育、社会教育、生涯学習、幼児教育や子育て支援など、さまざまな分野において大学と市が連携して住みよいまちづくりのために手を取り合っていくことになります。

関市消防団 健闘しました！

8月3日、加茂郡富加町で開催された「第57回岐阜県消防操法大会」に、関市消防団関方面隊安桜分団が出場しました。選手らはこれまでの数か月に渡り、毎晩、訓練を重ねて今大会に望みました。大会当時は猛暑の中、練習の成果を遺憾なく発揮し健闘しましたが、入賞にはいたりませんでした。これからも私たちのまちを守るために活躍してください。





郷土に伝わる清流のまつり

池尻の長良川河畔、弥勒寺一帯で3日、円空上人の法要と川供養を行う円空川まつりが行われました。今年は円空上人の314回忌で、同寺で護摩をたいて供養が行われ、抽選会やもちまきには約400人が集まりました。日が暮れたあとは円空上人や水難で亡くなった人、魚の霊を慰める万燈流しがあり、灯をともした煎餅を川に流すと、辺りは幻想的な雰囲気に包まれました。

ナイフ職人のもとで修行

関有知高校の2年生が職場体験学習で、世界的に有名なナイフ職人、原幸治さん(大杉)のもとへ3日間弟子入りし、ブロの技術をみっちりと教え込まれました。孝森淳樹君、難波稜弥君、塚原豊斗君の3人は自分だけのオリジナルナイフ作りに挑戦。腕や手が痛くなるほど厳しい作業でしたが、ナイフが完成するととても満足そうな笑顔を見せ、モノづくりの魅力を体験できたようでした。



味も出来栄也大満足

わかさ・プラザの料理実習室において5日、小学生によるおやつ作り教室が行われ、市内の小学生20人が参加しました。講師の指導のもと、小学生らはブルーベリーのケーキ、フルーツポンチとおやき作りに挑戦しました。フルーツポンチ作りでは、手に水をつけて楽しくこねて白玉を作り、真剣な表情でりんごやバナナなどを1口サイズに切ったりしてようやく完成。全員で楽しい会食となりました。

手で捕まえたよー

8月4日、やまゆり東保育園の園児が、八滝ウッディランドでせき止められた小川に放たれたニジマスつかみを楽しみました。園児たちは「ぜんぶとるぞー、エイ、エイ、オー!」と大きな声を張り上げ、一斉に川に入り大はしゃぎでニジマスを追いかけていました。捕ったニジマスはその場で塩焼きにされ、お昼ご飯として全員でおいしくいただきました。



こぼれ話



関有知高校の2年生3人が、市内のナイフ職人のもとでインターンシップ(職場体験)という取材に行ってきた。昨年からはじめた事業ですが、地場産業の未来を担う大切な試みとして、指導を引き受けたナイフ作家の原幸治さんや刃物業界の皆さんの熱い気持ちを伺い知ることができる取材でした。最近ではナイフを使った凶悪犯罪がマスコミや世間を騒がせ、ついにはナイフ所持に関する新たな規制も設けられま

した。しかし、刃物の製造に携わる皆さんは口々におっしゃいます。「刃物が悪い訳じゃないのに…」手や腕に痛みを覚えながらも必死に打ち込む3人の姿を見ると、ますますそう思いました。「最近、ナイフが犯罪に使われる事件が多発しているけど、どう思う?」そう聞こうと思いましたが、1本のナイフを一心不乱に磨く姿を目の当たりにして、聞くのをやめました。彼らはこの3日間でナイフ作りの技術だけでなく、モノを作る職人の熱い思いも知ることができたと確信しました。